

# ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



中区・本牧子どもディスコseason5 (P.02)

2020  
Vol.

# 023

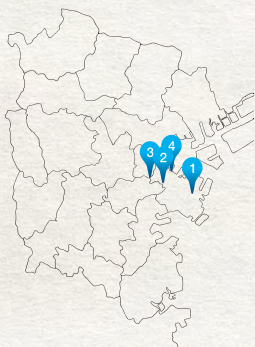
「特集 創作の場としてのまち」





中区・あいさつシリーズV.01.1 こんにちはうたっておどってつくろうよ(P.03)





まちとアーティストが  
他者として  
出会うそのとき

1



1

### ダンサーから 子どもたちへ手渡す 本牧のディスコ文化

横浜駅からバスで30分ほど、中区・本牧原にシェアスペース「HONMOKU AREA-2 (ホンモク・エリア2)」がある。元は映画館だった建物を活かし、かつての雰囲気を残す不思議な空間となっている。

この日行われたのは「本牧こどもディスコSeason5」。1970年代、ディスコブームの折、本牧は米軍住宅の存在もあり、海外の文化を取り入れ人気を博していた。こどもディスコはそんな本牧の歴史を下敷きに、

その日限りのダンスホールを展開。子どものためのディスコパーティーを開催した。空間演出も妥協せず、頭上には2つのミラーボールが輝き、光と映像でフロアを盛り上げるVJ (ビデオ・ジョッキー) のパフォーマンスと共に会場装飾を照らした。

ダンサーで実行委員会代表の内木里美さんは、前身となる「本牧アートプロジェクト」のレジデンスアーティストとして、2015年からこどもディスコを開催してきた。初年度は2ヶ月間本牧の個人宅にホームステイ。地域のコミュニティハウスや神社に足を運び、住民や子どもたちと作品を作り上げた。

第5回となる今回は、地域の小中高生と行ったダンスレッスンで振り付けた踊りをオープニングで発表した。子どもたちは本牧発祥のダンスステップ・ハマチャチャを見事に披露し、はにかみながらも大人びたダンスを踊った。後半では、市内のダンス教室の子どもたちが発表する場を設けたほか、内木さんもソロダンスを披露。場内ではノンアルコールの「こどもカクテル」を子どもたちが作るワークショップも開催した。

かつて本牧を盛り上げたディスコが、現代のアーティストの手によって、子どもたちのもとに蘇る。



2

## 波止場という名の施設で アーティストと まちが会う

中区・若葉町には、昭和41年築の元銀行を改修したアートセンター「若葉町ウォーフ」がある。スタジオ、劇場、宿という3つの異なる役割を持つこの施設は、パフォーミングアーツを中心に、市内外のアーティストを受け入れている。

「オルタナティブな活動をしている人が多いですね。劇場と宿が同じところにあるということを知って、ツアー公演でいくつかの地域をまわるときに、じゃあ横浜も加えようと考えてくださるようです」と語るのは、アシスタントプロデューサーの山田カイルさん。日中はスタジオで創作したり、劇場で発表を行ったりして、夜は宿



で眠る。日常の雑事から離れ、創作活動に集中できることが滞在制作の大きな魅力だという。そして、こもっている時間が濃密になるほど、地域への扉は開かれていく。「特に演劇は集団創作ですから、ここでプライベートな時間を確保しようとすると、まちに出かけるほかないんです。銭湯に行ったり、商店街で食事をしたり。研修で滞在していた中国のアーティストと地元中国コミュニティの間に交流が生まれたこともありました」。

まちと創作の場がつながる若葉町で、新しい風の通り道が生まれている。



3

## 磯子から黄金町へ 障害者地域活動ホームの ゆるやかな広がり

磯子区障害者地域活動ホームのメンバーが、中区・黄金町にある1の1スタジオで滞在制作を行った。福祉施設でのアート活動とまちを繋ぐ今回のイベント「あいさつシリーズ Vol.1 こんにちは うたって おどって つくろうよ」を企画したのは、同活動ホーム職員の安武宗吾さん。「何かを発表するぞということではなくて、もっと各々の表現を楽しめる機会にしたかったんです」。

まちに入るにあたり、アーティストの表現が助けになった。メンバーの絵や文字は、造形ユニット・ドゥイの手で大きなインスタレーションに。このほかにも音楽ユニット・即興からめーる団の手引きのもと、オリジナルソングを作成し、ダンサーの入手杏奈さんと振り付けも考えた。半屋外でのダンスタイムでは、近くで遊ぶ小学生も混ざり、ゆるやかな交流が持てたという。「オープンな場所でやることで、新しい人間関係が築けたことがとてもよかった。今回はたった一週間の滞在でしたが、福祉施設がまちに出かけるということに希望を感じました」。

地域や障害の垣根をこえて人々が出会い、それぞれの表現がゆっくりとまちに溶け込む時間となった。

4

## 移り変わるまちなみの中 路上観察から生まれる 演劇

「仕事で色々な地域に行きますけど、劇場の中って風景が変わらないんですよ。舞台上には同じセットがあって、客席は暗くて」と話すのは俳優・山内健司さん。公共劇場を中心に全国をまわると、横浜のおもしろさに注目し、2015年には象の鼻テラス「シアターゾウノハナ」にて、地域のリサーチを通して、ホームレス歌人・



中区・吉田町にて撮影

公田耕一を題材にしたソロパフォーマンスを作成、発表した。その他にも演劇を取り入れた音声ガイドの作成や、南区のアートスペースblanClassでのソロ公演など劇場外での活動に意欲的だ。

「まちの中に残された痕跡が気になるんですね。ここがどこなのか、ということも教えてくれる証のようにも感じるし、そこに降り積もっている時間を思うと、もはやこれは演劇じゃないかと感じるんです」。

生活と創作。異なる視点が重なったとき、まちが新しい顔を見せてくれる。

P.3左  
若葉町ウォーフ  
<https://wharf.site/>

P.3中  
あいさつシリーズVol.1  
こんにちは うたって おどって つくろうよ  
主催：磯子区障害者地域活動ホーム  
P.3右  
山内健司さん(青年団)



## アートと考える 子どもが育つ場所のこと



### 5 アート団体と企業の連携で 子育てをサポート

今回のラウンジでは「アートと考える子どもが育つ場所のこと」というテーマで子育てを取り巻く市民活動と行政・企業の連携の可能性を探りました。

外国につながる子どもたちが交流しアートを通して自由に表現できる場作りをしている LITTLE ARTISTS LEAGUE YOKOHAMA の望月実音子さんは「子どもを対象にしたイベントでは収益を得ることが難しく、助成金に頼っているのが現状です。企業と協働するなど活動を広げるために積極的にいろんな手段を模索している」と明かします。

株式会社ダッドウェイのイラストレーターで絵本作家でもあるくぜじゅんきさんは「20年ほど前は今よりマタニティ服やベビーグッズの選択肢が少なかったんです。もっと多様なデザインがあればいいのにとあって、企業

に自分のイラストを売り込みに行ったことからはじまりました」と自身の経験を明かしました。現在は港北区と子育ての連携協定を結び、乳児医療証カバーをデザインしたり、中区役所のプロデュースをしたりと、社会に向けた取組も実施しています。

認定NPO法人びーのびーの原美紀さんは「働き方改革で企業も社員にそれぞれの好きなことをやらせるようになった。SDGs(持続可能な開発目標)が追い風になっている印象があります。そこから地域に根ざしたNPOとの協働も進んでいます」と現状を話しました。

子育ての場所にアートが寄り添うことは、子どもたちが新しい世界に触れるきっかけにもなります。アート団体・企業がどのような方法でマッチングできるのか、その仕組みづくりが課題です。



【会場】港南台タウンカフェ(港南区港南台)

【ゲスト】望月実音子(LITTLE ARTISTS LEAGUE YOKOHAMA)、原美紀(認定NPO法人びーのびーの)、くぜじゅんき(株式会社ダッドウェイ)

【聞き手・進行】小川智紀(ヨコハマアートサイト事務局/STスポット横浜) 【主催】ヨコハマアートサイト事務局



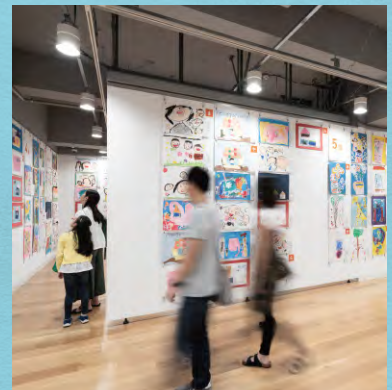
## 6 丘陵地を巡り 芸術文化と出会う旅

横田佳子（横浜市民ギャラリー  
鑑賞教育エデュケーター）

当館は、開館50周年の節目に、現在の西区宮崎町に移転して早5年。新しく移ったこの場所を拠点に、現在地域との連携を進めています。

西区は、JRの線路を挟んで海と山に分かれているようなイメージですね。関内駅前からこちらに移って、あらためて横浜は坂のまちなのだということを感じました。特にこのあたり一帯は野毛山というくらいで、急な坂道が多くあります。かつては一つの大きな山だったところに切通しをつくったので、現在では小山が二つあるような地形になっています。野毛山動物園や中央図書館がある側と、伊勢山皇大神宮や横浜成田山（野毛山不動尊）がある側です。無料でふらっと立ち寄れる施設が集まっているので、お散歩コースとしてもおすすめです。少し足をのばせば、アーティストのアトリエが並ぶ黄金町や、文化芸術創造発信拠点であるBank ART1929の施設もありますし、新しい表現につながる扉があちこちに開いています。

芸術文化でエリアを盛り上げる試みとしては、



紅葉ヶ丘を中心とした5つの公共文化施設による「紅葉ヶ丘まいらん」という事業がスタートしています。県立音楽堂（Musical Hall）、県立青少年センター（Youth Center）、県立図書館（Library）、横浜市民ギャラリー（Art Gallery）、横浜能楽堂（Noh Theater）の頭文字をとって「まいらん（MYLAN）」です。日本の近代建築史に大きな足跡を残した前川國男による建築物という共通点に着目したり、館ごとに異なる専門性を活かしたスタンプラリーを企画したりと、地域の魅力を発信するための取組を行ってきました。一度でも訪れた経験があれば、自身にとって必要なタイミングが来たときに「そういえば紅葉ヶ丘にこんな場所があったな」と思い出してもらえないかという期待をしています。いつかのための種まきといった感じでしょうか。

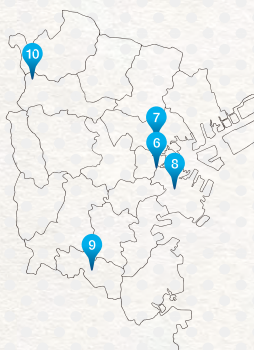
1965年から続く夏の恒例イベント「横浜市こどもの美術展」も、そんな種まきの一つかもしれません。市内の子どもたちから絵画を募集し、応募されたすべての作品を展示する企画です。来場者の中には、小さいころに応募してくださったという大人の方も。50年を越える企画ですから、そろそろ親子3代で絵が飾られたことがある、というご家族もいらっしゃるのではないかと思います。

今後は近くのケアプラザや保育園など、生活に密着した施設とも協働することで、より地域との接点を増やしていくつもりです。地域と一緒に育ち、長く続いていく仕組みをつくるため、これからも地域施設との関係を大切にしていきます。



## 事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、  
今日も、横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。



7 11月23日(土・祝)

東急東横線・反町駅。東急東横線の地下化により生まれた線路跡を活用した緑道を会場とした東横フラワー緑道フェスタが6月に行われ、今日は同じ実行委員会が主催する竹灯籠づくりと映像制作のワークショップが開催された。あいにくの雨でも参加者は多く、地元の小学生たちは集中した様子で作品づくりに取り組んでいる様子。



8 12月14日(土)

NPO法人あっちこちによるクリスマス廃材楽器ワークショップとコンサートのため、中区・麦田地域ケアプラザへ。入口では麦田町発展会のキャラクターである妖精の「ムギー」と「ギター」が出迎えてくれた。オリジナル楽器づくりを担当するのは、黄金町BASEのアーティスト。子どもたちは好みの音を探して、片っ端から木を叩いている。



9 1月25日(土)

栄公会堂をアートで彩るさかえegaoフェスティバルも今年で7回目。建物のガラス部分には事前ワークショップで制作されたカラフルな魚が泳ぎ、会場を盛り上げている。展示ブースでは公募で集められた作品や、アーティストと地域作業所や個別支援学級などとのコラボレーションから生まれた作品がずらっと並び、見応え十分だ。



10 1月26日(日)

緑区民文化センター みどりアートパークで「第6回 表現の市場」を見る。客席はほぼ満席状態。「はっぱオールスターズ」によるラップや、「みなせた」の「車椅子あるあるミュージカル」などを堪能。最後は演劇・ぶかぶか版「どんぐりと山猫」。オープニングの合唱が染み入る。温かみのある舞台に、観客も見入っていた。



## ヨコハマ アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

## 事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局  
(STスポット横浜、横浜市文化観光局、  
横浜市芸術文化振興財団)  
〒220-0004 横浜市西区北幸  
1-11-15 横浜STビル 208  
(認定NPO法人STスポット横浜  
地域連携事業部 内)  
TEL:045-325-0410  
FAX:045-325-0414  
WEB: <https://y-artsite.org>  
MAIL: [office@y-artsite.org](mailto:office@y-artsite.org)



@Y\_Artsite



ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

## 季刊ヨコハマアートサイト Vol.023

発行 ヨコハマアートサイト事務局  
編集 認定NPO法人  
STスポット横浜  
テキスト 小川智紀 池田友実  
加納美海  
デザイン 相澤事務所株式会社  
撮影 小淵真希子  
印刷・製本 株式会社 三島印刷  
発行日 2020年03月31日

季刊誌についてのご意見・ご感想も  
お待ちしております。



# YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

## 横浜の地域文化を支援するための 「ヨコハマアートサイト」助成金

横浜市地域文化サポート事業

「ヨコハマアートサイト」は、毎年、横浜市内での文化芸術活動を公募し、助成を行っています。

1件  
10万円～

ヨコハマアートサイト  
2020募集期間

2020年3月1日(日)～4月3日(金)

詳細は募集要項およびウェブサイトをご覧ください。  
なお、横浜市の令和2年度予算が横浜市の会において議決されることを条件としています。



本誌で取り上げた場所



あうたびに、あたらしい  
Find Your YOKOHAMA

最新情報・詳細はこちら <https://y-artsite.org/>

ヨコハマアートサイト

